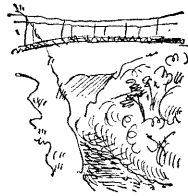


卒園生とのキャンプ

私の園では、七月の下旬に、毎年卒園生のキャンプを行なう。これは、八年程前から、細やかに続いているものである。

卒園すると、子供達の様子を知る機会が、ほとんど無くなってしまうこと、又、私自身が小学生の頃、毎年夏休みに入ると、宿題を抱え、山形の田舎に行き、川や畑を相手に、自然の中で過した楽しい思い出があり、大人になった今でも、自然の中にある事が何よりも好きで、成長した子供達と一緒に、自然の中で過したいと云う単純な気持が、幸い、丹沢が近い距離である事も合わさって、始まったようである。



折原祥子

毎年二〇名前後の子供達と一緒に、思う存分山の空気を吸ってこようと、一泊で出掛けるのである。

〈キャンプ場のこと〉

私達の過すキャンプ場は、西丹沢にあり、御殿場線の松田から、バスで三〇分程山に入った寄^{ヤドカリ}という所にある。

バスの終点から、川に添ってテクテク二〇分、田んぼの中を歩いて行くと、町に近い場所とは思えない程山奥に感じる山裾の川原に、小さな小屋が建っている。

私が学生の頃、十五年位前になるが、始めて行った頃と比べると、大分便利になり、変わってしまったが、小屋のおじさんの自然を愛する心と、それを、今の子供達にわかってもらいたいと、一生懸命努力している姿は変わらず、感動させられるものがある。

「今の大学生は、歩きたがらず、ラジオを手放さず、山に来て、お風呂に入りたいなんて云うから、川に投げ込んでやったよ。」と、嘆きながら話してくれる。

〈山の生活〉

あまり背負った事もない大きなリュックにいろいろ詰め込んで、大鍋など炊事道具を持ち、フーフー云いながらやっとたどり着く。

お昼に、お母さん手作りのお弁当を、川原に座って食べる時の子供達は、疲れも忘れて、とてもうれしそう。涼しい風と、足元のきれいな水、お弁当もそこそこに、すぐ水に足を入れる。

食後、さっそく水着に着替え、おやつを持ち、十五分位山道を歩いて、上流に出掛ける。その場所には、緑の木々と、

透き通って流れる水と、川原の大小の石がある。

嬉しい事に、人間がほとんどいない。そして夏の暑さを吹き飛ばす大きな滝がある事が何よりだ。

子供達はさっそく活動開始。幼稚園の子供とは、又違うダイナミックな活動を、自然を相手に始める。川はあまり深くないので、泳ぐ為に石で塞止める。皆で大小の石を運び、流れに逆らって、せっせと積み上げ、少しずつ深くしていく。塞止めるのも、石の並べ方等かなり考えなければならぬ。

そのうち競争のようになり、あちこちに泳ぐ場所や、自分達のお城が出来る。

川の水は冷たいので、唇を青くしながらも、水に潜ったり、出たり入ったりして遊ぶ。

付き添いの私達も、一緒になって夢中で石を運んだり、川を漕いで歩いたりと楽しみながら、たまに思い出したように、「唇が青くなっているから水から出ましょう」と声をかける。

夕方迄水遊びをした後は、夕食を準備する。目をこすりながら炊いた飯合の御飯に、大鍋で作ったカレーをかけ、川原の石をテーブルとイスにして食べる食事は、何とも云えず、皆すごい食欲で、大鍋をたいらげる。

後片づけをしながら、キャンプファイアーの薪を積み上げて準備し、夜は、花火大会とファイアーを楽しむ。

涼しい山の夜は、星がとても美しい。

翌日は、朝のすがすがしい空気の中で体操をし、朝食の準備が始まる。

片づける頃には、「早く滝に泳ぎに行こう。」と大騒ぎであるが、そこを少し我慢して、お昼のおむすびをにぎり、パーベキューの準備をして、まず食物の確保である。

手分けて、薪、材料など持ち、昨日の場所に勇んで出掛ける。そして水の中に入ったり、出たりの繰り返し、自然の中に解け込んで、何の道具が無くても、飽きる事なく楽しむ。水の枯れた滝を、上流迄探険したり、美しい石をみつめたりと自由に遊ぶ。

お昼になると、川原で火を燃し、パーベキューをしながら、自分達でにぎった、ちよつと変形したおむすびをほおばり、体を暖めて、夕方迄、又水遊びをくり返す。

こういう時の子供達の様子は、実に楽しそうで、次々と遊びをみつめていく事が出来る。もう一泊したいという子供達と、責任上、いささか疲れが出て来た付き添いは、楽しかった余韻を残しながら、おじさんに見送られ、帰路につくので

ある。

〈ある出来ごと〉

ほとんどこのような生活で、毎年のキャンプは終るのだが、ある年、ちょうどつゆ明けにぶつかり、着いた頃より雨が降ってきてしまった。それが夜になると、大雨注意報が出る程になり、機動隊の方が見回りに来て、もしもの時には避難するようにと注意があり、責任者は、打合わせをするまでになってしまった。子供達は、そんな事は全く知らず、部屋の中でゲームをして、楽しそうに大騒ぎをしている。

夜八時頃になると、川が増水し、川原もなくなってしまう。大きな岩が雷のような音をたてて流れて行く。

昼見ると、とても機械でも動かないような大岩が、水の流れで木の葉のように流れていくのである。

私も始めて見る自然の力に驚いてしまった。おじさんが、子供達に、「いつでも見れるものではないから。」と、川のそば迄連れていってくれる。

濁流がすごい勢いで流れ、岩を押し流している。子供達も、初めて見るこの川の様子に、びっくりし、「川が怒って

いるよ。」という言葉が出て来る。

「あの岩がかくれたら、危ないから避難する。」とおじさんは、それ迄の経験から、ちゃんと知っているのである。

昼、水遊びをする川とは、全く別のようになり、自然の大きき、恐ろしさを知らされた。雨が止まなかったら起すから、と子供達を早目に寝かせたが、私は心配で寝る所ではなく、雨の音を聞きながら、早く止んでほしい。無事に帰れる様に、と祈るばかりであった。

うとうとして、ハッと気がつくとき、いつの間にか雨は止んでいた。そーと外に出てみると、素晴らしい満天の星空に、月が輝いている。星が今にも落ちてきそうに思える。

私もこんな美しい星空を見たのは数少ない。感激のあまり、部屋にとび込むと、子供達を端から起した。

寝ぼけ眼で起きた子供達は、外に出ると、星の美しさに見とれ、しばらくの間、皆で、雨上りの美しい空を、寒さも忘れて眺めていたものである。

この時の自然との出会いは、いつものキャンプでは経験出来ないものであった。でも、本当に素晴らしい出会いであったと思う。

今、中学三年生になっているこの時の子供達は、あの時の

星のきれいだっただ事と、川のすごさは忘れられないと云う。

私も同じである。

このような、大きな自然の中に入った時、あの年齢の子供達は、どのような感じ方をするのだろうか。

私にはわからないが、各自がそれぞれ、何かを感じとってくれるだろうと思う。

「楽しい」「楽しかった」という事だけで良いのかも知れない。

一泊のキャンプだが、早くから楽しみにしていて、四月頃から「今年はいつ?」「今年も行くから……」などと云われると、「又行きましようね。」と云ってしまふ。

準備のために集まり、買物と云っては集まり、反省会と云っては又集まる事も楽しいようだ。

食べて、片づけての繰り返しと、水遊びのキャンプだが、これからも、続けられるうちは続けて行きたいと思ってる。

(神奈川・松ヶ丘幼稚園)